

はじまりの物語

ーキャンパスに込められた想いにふれてー

荒井 聡子

（本稿は去る 2014 年 3 月 4 日に最終講義に代えてお話しした内容を、キリスト教文化研究センターからのご依頼で多少手直しして文字化したものです。地名や省庁名などは当時のものを使用しますこととお断りしておきます。）

人が一歩ずつ歩みを進めるように一日一日を重ねて本学も開学後二十年近くなりました。どのような施設にも、出来上がって機能し始めると見えなくなる基礎の部分にそれに関わった人々の想い、苦勞、工夫などが込められているものと思います。この度のお話では、開学前から当初五・六年にわたり、キャンパスが徐々にかたち作られてゆく過程で私が見聞きしたり経験したりしたことの中からいくつかの話題を取り上げて、完成後においでになった皆様の印象にいくらかの背景を加えさせていただければと願っております。

・川内市とのこと

本学はご存知のとおり川内市の誘致を受けて鹿児島純心女子学園が設置したものです。川内市では街の将来像を描かれる中でこの街に大学をという要望があり、純心にも接触されたいらしいのですが、はじめは理事長が乗り気でなかったようです。鹿児島市の紫原にある鹿児島純心女子短期大学を移す理由もなく、さりとてこの川内の地に新たに四年制大学を作って果たしてどうなるのか、自信が持てないということもあったと思います。しかし丁度その頃、文部省が将来日本の高等教育機関は大学のみにするとの方針を打ち出してきました。短期大学は新たに認可せず、既存の短大も一定期間内に四年制大学にならなかった場合は暫時抑制して行くというものです。この政策は強硬な反対にあって腰折れとなり現在に至っていますが当時は大きな波紋を起こしました。鹿児島純心女子学園としてもこれでは将来短大が困ってくる、と少し動きかけたところに川内市側からの熱心な働きかけがあってお話がまとまったようです。たしか森卓朗前市長だったと思いますが、あの頃は「一週間に十日純心に通いました」と述懐されたことがあります。この事業には 1990 年代の初めごろから今は亡き仁禮国市市長を中心に川内市役所の方々が関わられたわけですが、中でも森卓朗収入役、岩切秀雄総務企画課長は仁禮市長に協侍のようにつかれて大学設置に尽力されました。仁禮市長の後は森市長そして現在の岩切市長まで、この方々が三代続いて川内 / 薩摩川内市長に就任しておられますことは本学にとって大変幸いなことと存じます。当時大学誘致の条件としては、土地の買収と造成、一期工事として建てる校舎までは

川内市の方で責任をもってくださり、認可申請関係の仕事一切とその他の設置経費や建築費は学園側が持つということでした。鹿児島純心女子学園では学校法人理事長のシスター長谷ノブのもとに現在の松下学長のお姉さまシスター松下ヤス子短期大学学長が四年制大学の学長就任予定者としてリーダーシップを取られ、教学側と事務局側からスタッフがついて川内市と密接な連絡を保ちながら仕事が進められました。私自身はこの企画の中心にいたわけではありませんが一応スタッフの末席に連なっておりますので時々行動を共にさせていただきました。

大学設置の第一歩として川内市から提示されたキャンパスの候補地は二つありました。一つは JR 川内駅東口近くの「西中址」で、今は住宅地になっておりますが川内西中学校の校舎が取り払われた跡地に周辺の宅地をいくらか買収して加えるというものでした。もう一つは天辰町の小高い丘です。こちらはまだ山林でしたので市の車で案内して頂きました。まず水田の間の農道から見上げて「あのあたりです」と。次にその丘に入って木立のまばらなところから予定地の北側に開けたのどかな田園風景を見、最後に寺山の上、寺山公園の展望所から予定地全体を見せていただきました。指し示された場所は深々とした雑木林に見事な竹林が続いていて、それは本当に美しい眺めでした。私たちがここに大学を建てればこの雑木林もこの竹林もなくなるのだと思うと、もったいない惜しいという気持ちでいっぱいになりました。それでも大学は遠い将来を見越して設置するものです。東京の早稲田大学(1882年創設)の校歌は「都の西北、早稲田の杜に」という言葉ではじまりますが、現在は高田馬場の喧騒の中にあって自然の杜などは想像もつかない有様です。都市の発展とはそういうものだから、やはり大学キャンパスは創設の時に環境の良いところをできるだけ広く確保しておかなければ、ということになり、本当にもったいないけれども天辰の土地をいただきたいとお願いしました。それで、大学誘致のためという川内市の求めに応じてご先祖様伝来の美しい山林を手放された地主さんたちの本学に対する思い入れは大変深いものがあつたのです。1994(平成6)年、開学の時には川内駅前に「祝鹿児島純心女子大学開学」と大書した飾りが出来ていて商店街にも軒並みに同文の揃いの小型看板が下がり、町中が喜んで迎えて下さっている感じでした。

・地主さん方、地域の方々の想い

そういうわけですから、大学がはじまりますと地主さんに限らず見学者が次々に訪れて来られました。個人で来られる方、グループで来られる方、大型バスで乗り付けて来られる団体など、中高生はもとより若い方々から高齢の方々まで、年齢も立場も様々で、正確な人数は記憶しておりませんが当初は年に3400何名とか聞いております。大型バス一台に何人乗れるかを考えて、そのバスが何台か着く日もあるとなりますと相当な数にはなるわけです。説明のために座って頂くにも一教室に入りきれませ

ん。やはり一度に百人くらいは入れる部屋が一階レベルにも必要、ということから現在のオーディオルームができた訳なのですけれども、この建物が完成してからはそのような大規模な来訪者はあまり度々はないようです。高齢者の施設などからもよくおいでいただきましたので、当時の受付担当者が後で打ち明けたところによりますと、「このようなグループに度々来ていただいても学生募集にはつながらないのだけれど」と内心つぶやき始めた頃、一人のお年寄りの方が「いつも下から見上げていて、冥途の土産話に一度中を見たいと思っていた」とおっしゃったそうです。彼女はびっくりして、冥途の土産話が不愉快なものになっては大変と以後は心を込めてお迎えするようになったとのことでした。大学の窓口にあたる総務課の北原課長は川内のお育ちの方でしたが、細かい心遣いと丁寧なきれいな鹿児島弁で高齢者の方々を案内されたので大変喜ばれておりました。私も課長の対応の端々を耳にしながら鹿児島弁は本当に美しい言葉なのだと納得した次第です。約十万平米ある本学の敷地に何人の地主さん方が関わっておられるのか伺ったことはありませんが、交渉にあたられた市の担当者のご苦労が偲べれます。地主さん方の中にはすでに川内を離れて別の地域にお住いの方々もあるわけですが、そのお一人に、ご自分の所有地だったところに鹿児島純心女子大学が建ったことに不思議な縁を感じておられる方がおられます。その経緯は先生方が日ごろ学長室で目にしておられる電気蓄音機にまつわることであり、ご本人の井上文男氏からも快諾をいただいておりますので、お伝えしておきたいと思います。

井上氏は現在東京にお住まいですがご生家は川内川のすぐそばで天辰街道沿いにありました。お父様はアメリカ通いの貨物船の船長さんでしたが、1939年にお土産としてアメリカ製の立派な電気蓄音機を持ち帰られました。SPレコードのプレーヤーですが、その頃日本ではハンドルを手回してモーターをかける形のものが普通でしたから、電動式は最新型だったと思われます。けれども小さいお子さん方にしてみれば何処から声が出てくるのが不思議で、スピーカーボックスに頭を突っ込んだりして悪戯していましたとお話です。その電蓄は演台よりも少し高いくらいの大きさの物ですから、また別の遊び方としてお座敷の畳からこれに板を立てかけて「滑り台」にして楽しまれたようです。電蓄にはまことに迷惑なことです。育ち盛りの少年たちにとっては幼き日のまたとない友となつたのです。こうしてふるさと川内で伸び伸びと育たれた文男少年もやがて青年となり、上京して青山学院大学で英語を専攻されますが、この大学で一生の宝となる恩師を得られました。ローランド・ハーカーというお名前のこの先生は、アメリカのイエール大学で神学を学ばれた牧師さんですが生涯英語教師として終始された方です。イエール大学在学中に奨学金を得てイギリスのオクスフォード大学に留学された折、日本の財閥三井家のご子息三井高維^{たかすみ}氏と出会い、

彼のキリスト教入信に際してはゴッドファーザー（信仰上の後見者）になるなど親交を結ばれ、彼の招きで来日して青山学院で英語を教えるかたわら啓明学園の創設にもかかわられました。日米開戦にあたっては最後の船でアメリカに帰国し、戦後開かれた日米航路の最初の船で来日してもとのことにお仕事に復帰されたのです。また義宮（常陸宮）様の英語の先生をなさり、社会的には道德再武装（Moral Rearmament = MRA : 1938年にイギリスで始められたキリスト教的道德による社会改革運動）の推進に尽力されるなど精力的に働かれたようです。井上氏が薫陶を受け心酔されたのは多分この頃の理想を掲げて英語教育に打ち込んでおられた若きハーカー先生だったのでしょう。まだ髪も豊かなお姿で学生服の井上氏と撮られた写真を見せていただきました。後年先生はMRAの事業として小田原に建てられた英語学校の経営にあたっておりましたがイランの王立大学からの招聘を受けて行かれました。しかし1979年2月にイラン革命が起こって即時国外退去を命じられ、手に持てるだけの荷物をもって日本に帰ってこられたのです。再出発のための情報を得ようと訪ねられた上智大学のお世話で1979年4月から鹿児島純心女子短期大学に新設された英語科の科長として着任されることになりました。たまたま就任予定だったアメリカ人のシスターが来日できなくなり英語科長の後任を探していたところだったのです。ハーカー先生はこのスピーディーな就職についていつも感謝しておられましたが、鹿児島純心短大としても思いがけない歴史のいたずらで素晴らしい初代英語科長を頂くことになり、三間先生、尾曲先生、藤田先生、そして私なども育てていただきました。ハーカー先生は1992年に鹿児島純心短大を退職されてアメリカに帰られましたが、1993年に叙勲のために来日された他は奥様と静かな老後を過ごされ、1996年に帰天されました。

一方、教え子の井上文男氏は大学を卒業されて後ハーカー先生仕込みの英語力を生かして東京でお仕事につかれ、川内のご実家に戻られることはなかったようです。ご家族の方々もそれぞれに独立されて川内のお家には住まわれる方がなくなり仕方なく家を畳むというお話になった時、井上氏は電蓄を「幼い日の記念品として僕に下さい」とおっしゃって貰い受けられ、相当の費用をかけて東京に送り、ご自宅のお座敷に置いておられたのです。ご実家の土地なども徐々に処分されて生まれ育った川内とのつながりが無くなってゆくことを淋しく思っておられた矢先、恩師ローランド・ハーカー先生と鹿児島純心女子短期大学英語科とのつながり、またその流れでつくられた国際人間学部を擁する鹿児島純心女子大学がご自分が手放された天辰の土地に建てられている事がわかり、井上氏は深く心を動かされ驚かれたようです。実際に来学されてキャンパスをご覧になった時には、良いものが出来たと喜んでくださいました。そして、ふるさとを愛する心と恩師ローランド・ハーカー先生を敬愛する心で自分は今後とも川内の地とこの大学につながりたい、ついてはその絆のしるしとして思い出の電

蓄を学内のどこかに置いてもらえないだろうか、とご寄贈のお申し出がありました。私共としてもそういうことでしたら喜んでお受けいたしますということで、いったん東京のご自宅に送られたアンティークとしても価値のありそうな電蓄が川内に送り返されて来ました。一見飾り棚のようにも見えるもので現在は学長室の正面に置いてあります。レコード盤も数枚いただいており、富樫先生という音響関係に明るい先生が少し手を入れて下さって音が出るようになったのですが、しばらくしてまた動かなくなっていました。

井上氏のように土地によせる想いを何か物に託して残されるのも一つの方法でしょうが、目に見える形をとらなくともそれぞれの元地主さん方が「幼いころ蟬取りに行った雑木林だった」「毎年筍を掘りに行っていた竹林だった」と沢山の思い出を胸にたたんでこのキャンパスの変貌を見ていらっしゃるのです。こうした情緒的価値も含めて貴重なものを譲って頂いていることを私たちも忘れないようにしたいと思います。

・設計と施工 デザインと技術

本学キャンパスのオリジナル総合設計（サンタマリア館を除く）を担当したのは東京の雄建築事務所です。聞くところによりますと、大学設置に関しても色々とお世話になっておりました尾辻秀久参議院議員からお話があって、今建設業界は冷え込んでいて大きな仕事が少ないので、若い設計士たちを育てたいから利益は二の次にしても大学の校舎建築をさせてほしいと言っている業者がいるがどうか、とのことでお願いしたようです。社長さんはすでに故人となられましたが小川雄作という方で、人格的にも本当に素敵なお方でした。会社としては校舎建設予定地の地形と環境を詳しく見た上で、施主となる大学の性格を調べ今回の設置について抱いているヴィジョンを十分に聞かれたと思います。松下初代学長は本当に豊かな夢をお持ちでしたから将来を見越して熱く語られたことでしょう。施主側の想いを設計士さん方がよく理解されたところで雄建築事務所では社内コンペを行い、選ばれた設計が現在私たちの住んでいるキャンパスの姿です。まず建物配置のコンセプトですが、正門に立って前を見ますと正面に聖母像がありその後ろがチャペルです。左には高い壁があって視界を遮り、右は桜の植え込みに続く盛り土の斜面で外の車道は見え音もあまり聞こえません。つまり本学に入る方の視線がまっすぐに向かうところは「聖」の空間なのです。聖の空間を見つめて広い道を進み、聖母像の下まで来ますと左右に視野が開けます。左を向くと滾々と湧き出る形の噴水を囲んで正面に図書館、左に研究棟、右に講義棟と実験実習棟があり、ここは「知」の空間です。ここへ導く形で左側には管理棟があり、少し角度を変えて低い立地に総合施設の学生食堂が配置されています。右側には講義棟の続きに講堂や文系特別教室を擁する校舎（建築は三期工事）、そして講義棟から少し突出する形で体育館があります。オリジナルの完成予想図では聖母像を中心として

きれいな十字路になっており、右方向には留学生や教職員の宿舍が描かれていて、これは私の想像ですが「生」の空間として計画されたものかと思われます。そしてこれらの外側を校内車道が宿舍の敷地から校舎の正下面にある駐車場をつないでキャンパスの外縁を回って走っています。しかし、この宿舍群は諸般の事情からキャンパス内に建設されませんでしたので、聖母像から右に向かっては十字路の先に「知」の空間に対応する建物はなく、道に沿う形で後年サンタマリア館ができました。

施工について、川内市としてはすべてにできる限り地元の業者を使うという原則があったようで、一期工事は鴻池組に加えて川内の植村組と春園組、三社の協働（Joint Venture=JV）でした。雄建築事務所からの現場監督としては、設計者なのでしょうか富田さんとおっしゃる若手の方がついておられました。本学の校舎の特色はご存知のとおり四階までで高さを抑えた瓦葺の屋根で、屋根にはスペイン瓦、床には同系の煉瓦が使われ壁面もやわらかな暖色であること、そして円形や丸い曲線が多く使われていることです。丸い飾り窓や上部が半円形になった窓の列があり円柱の並ぶ回廊があります。そして数ある円柱にはそれぞれ二重円の基底と花形に刻みの入った柱頭がついているのです。さらに言えば掲示板の並ぶ「アンフィ」（学生食堂）からの連絡通路も直線ではなく「S字回廊」と呼ばれる優雅な曲線を描いているのが二階から見るとよくわかります。これに合わせて三期工事でも講義棟から江角記念ホール正面への室外通路を曲線にしています。このような柔らかな曲線を出すのは工法的にも大変なのだそうで、機能本位の箱型ビル建築では考えられないことです。一期工事の途中で現場を見学させていただいた時には、あちこちにコンクリートを流した型枠が置かれて柱頭などが作られていました。もう一つこの時に印象に残ったのは教室の床を張る作業をされていた方が、小型の正方形で分厚い寄木のベニヤ板を見せて、この建材はすり減りにくいこととこの上で物を引きずってもあまり大きな音がしないように消音効果のある素材を入れてあるので教室用に選びました、とおっしゃったことです。入試の設営などで一斉に教室の机椅子を動かす時にも耳をつんざくような騒音にはならないようですが、その度にこの時の情景を思い出します。私たちの知らない工事関係者の配慮は他にも随所にあることでしょう。限られた予算の中で設計者や施主の思い通りには行かなかったとしても、一見無駄とも思える手間暇をかけて作り出してくださった瀟洒なキャンパスのミッションスクールらしい美しさがここで学び働く者に与えている情動的な影響を思う時、合理性を超えたところにある感性の力を感じます。

また、無知な私にデザインというものを意識させた出来事もありました。犬塚先生のご縁で薩摩の留学生たちの留学先ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ（UCL）と本学との間で大学間交流の協定が結ばれることになり、別件で来日されていた同カレッジの対外関係担当学館長補佐のジョン・ホワイト教授が本学を訪問されました。

ホワイ先生はイギリスで叙勲も受けられた美術史の権威で名誉教授、UCLの文学部長や副学館長を勤められた方ですが、本学キャンパスのたたずまいがすっかり気に入られたようで犬塚先生、設計士の富田さん、そして私と四人で歩きながらデザインや構想を一つ一つほめてくださっていました。ところが学生食堂の外にあるアンフィ・シアター（円形劇場）を模したところまで来ると急に眉間にしわを寄せられ「これはどうしたのですか」と怒り出してしまわれました。問題は、せりあがった座席部分を取り囲む円柱の列とそれを結ぶベルト状の構造、それにつけられたランプまでは上出来らしいのですが柱列の端にある階段に沿って腕木のように内側に伸びているベルトが全体のデザインを台無しにしているというわけです。どうしてこんなことをしたのかと詰問されて富田さんは苦笑しながら「実はオリジナル デザインにはこれは無かったのですが、構造の方からどうしても必要だといわれて…」と説明されました。建築の仕事には、実際の施工に入る前に設計者のデザイン通りに建てて問題がないか構造的な角度からのチェックが入るらしいのです。しかし百戦錬磨のホワイ先生は少しもひるまず「君ね、そんなことで退いてしまってはだめだ。これはデザイン上どうしても必要なのだと突っぱねれば構造の方は何とかするものだよ。」と惜しがられ、おしまいにはイギリス流の冗談で「この階段の下端にある柱にわたしが『THE TOMB OF A GOOD DESIGN（良きデザインの墓）』という墓碑銘を書いた銅板をはめこんであげるからね」と言い出される始末です。構造担当の方が何とおっしゃるかとは分かりませんが、デザインに関する限りこれは裏返しの褒め言葉なわけですから富田さんは長く心にとめられたことでしょう。あの階段を歩くたびに茶目っ気に託して若い設計士を励まされたホワイ先生の温かいお人柄を思い出します。

二期工事は附属聖堂セント・メアリーズ チャペルで、1995（平成7）年1月着工、同年12月竣工です。用地については、市の予算で特定宗教に関わる敷地を購入することはできないところから修道会が購入して寄付した形になっております。施工は鴻池組ですが植村組からの派遣技術者が一人加わっておられました。雄建築事務所からの現場監督は青木さんという方でした。同じ雄建築の建物でもチャペルだけは他の校舎群と雰囲気違います。聞くところでは、これは施主である本学の方が社内コンペで選ばれていたものとは別のデザインを指定したのだそうです。そのデザインによればこのチャペルの周囲は池になっており、そこから正門に向けて清流を作り鯉なども泳がせたいとの夢もあったようですが、防水工事だけでも莫大な費用がかかるらしく結局は芝生と白い玉石をしいた現在の形になったとのこと。聖堂オリエンテーションのときにお聞きになっておられると思いますが、セント・メアリーズ・チャペルは八角形です。旧約聖書の創世記の中で神は六日間で天地創造を終え七日目に休まれたとされているところから被造界が動き始めるのが八日目というわけで、西欧では八

という数が新しい命や出発を象徴する数とされて洗礼盤や洗礼堂その他の建築やデザインに八角形がよく使われます。設計者としてはここで新しい生活をはじめる学生たちを精神的に支える聖堂にふさわしい形として選ばれたということでした。また校地の背後にある森を借景とする大きなガラスの窓を挟んで小さな色違いのステンドグラスが左右に六個ずつはめこんであり、それぞれにシンボルマークが刻まれています。色もシンボルもキリストの十二弟子のひとりひとりのもののなのです。本学聖堂を含めてカトリック教会では正面にキリストの像のついた十字架を掲げますが、青木さんは十字架のキリストを中心にレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」の構図にしたがって弟子たちのステンドグラスを配置されたそうです。どの窓が誰なのか、頂いた資料を見なければ覚えていないのですが、その資料は今どちらに保管されていますでしょうか。また、チャペルといえば教会音楽を思い出すわけですが、セント・メアリーズ・チャペルも宗教音楽の演奏のために特別な配慮をして建てられていて、素晴らしい音響効果をもっています。まず吹き抜け部分は周囲の壁の上部が1メートルの空間をとって二重になっていて内側の壁に四角い穴があけてあり、後部二階の聖歌隊席では背後の壁に煉瓦が凸凹にはめ込んでありますが、こうした空間や凹凸は音の反響を調節するためのもののなのです。天井はコンクリートで仕切られた正方形の中に縦横斜めに梁を入れて八分したものが連続していますが、あの仕切りの奥は吸音板になっています。下から見ると直角二等辺三角形がたくさん並んだ構造ですが、あの角度が音響効果のために絶対に必要なのだそうです。90度の角度は通常の工法でできるが45度を正確に作れる技術者はこの辺で自分の知るかぎりでは植村組に一人おられるだけなので、この工事のために頼んで派遣してもらった、とのことでした。それは底辺の両端部分に鉄板を使うことで木枠では出せない鋭角を作る工法だそうです。1995年の12月にセント・メアリーズ・チャペルは完成しました。この年のクリスマスには聖堂オープニングということで川内純心女子高等学校のハンドベル部に演奏していただきましたが、指揮者の安楽先生も音響の良さに感動しておられました。青木さんは東京からわざわざ来られて二階席でじっと聞いておられましたが、演奏が終わると「本当に僕が望んだとおりの残響になった」と涙を流して喜ばれました。宗教音楽に合わせた残響をもとめた設計に施工の技術が十分に応えた成果なのでしょう。このチャペルでは聖歌が本当に美しく響きます。神さまへの捧げものとして「音」が大切に扱われているからです。いつか設計者の思いがここで歌う聖歌隊によって「祈りの音楽」に結実し、チャペルの魅力の一つとなりますように願っております。一見粗削りに見える私どものチャペルは、この他にも多くの点で工夫と真心を込めて作られているのです。

チャペルが出来て2年後、1997（平成9）年度は前期に地震、後期に台風に見舞

われた大変な年でした。鹿児島県西北部地震と名付けられた地震は3月26日に川内で震度5強、5月13日には川内で震度6弱の揺れで、室内でも机につかまってやっと立ってられる感じでした。校舎の壁にはひびが入り、体育館も天井のコンクリートの一部が崩落し、幸い人は居なかったもののまだ新しいフロアーがかなり損傷しました。校地の北側、遊水池に面した側に長い地割れが出来て相当長い間ブルーシートをかぶせてあったのを記憶しています。9月には瞬間最大風速74メートルの台風19号に見舞われました。屋根のスペイン瓦が針金でつながれたままずれてしまい、噴水広場では四隅にあるマンホールが雨量を受けきれずにバリアフリーでつながっていた図書館前通路まで海のように冠水し、メンテナンス用に床を切ってある部分から通路下を走る暗渠に水が入って中を通してあった内線電話などの線も水浸しになりました。南九州の台風にとまなう集中的雨量までは計算に入れてなかったマンホールの容量を増やして作りなおし、外見を損なうことを覚悟で図書館前通路の端にブロックを並べたり、体育館の天井と校舎の壁や屋根を修復したり中々大変なことでした。また正門からの通路に沿ったいわゆる「桜の園」の桜も何本か折れたり根こそぎ抜けたり、図書館外の芝生にライオンズクラブが植栽してくださっていた「レオの柱」も石の標識を残して樹木の方は大半損なわれてしまいました。

このような自然の脅威の記憶もまだ新しい1998年には、純心女子学園の創立者シスター江角ヤスの生誕百年を記念する事業として1999年の竣工を目途に第三期工事の新校舎建築が始まりました。施工は川内市の春園組、雄建築事務所からの現場監督として常駐されたのは長谷川さんという若い設計士の方でした。工事の進行中は施主と設計者と施工者の代表が定期的に「建設会議」を持ちますが、たしか最初の建設会議の時に最新の耐震建築の工法として「免震構造」が紹介されました。建物の土台を地面に直接固定せず弾力性のある基底に建物全体を載せて、地面の揺れを吸収すると同時に建物自体も崩壊しない形で揺れさせるといふものです。「建築費が25%ほど高くなりますが、どうされますか？」との問いに学校法人側は「お願いします」と答えました。厳しい財政の中でも学生の安全を最優先にした決断で、鹿児島県では本学が免震構造の申請第一号です。本学に続いて鹿児島市内の病院が申請され、建物の完成は病院が先になったそうです。作業が始まり基礎工事が終わると免震用のブロックが次々にクレーンで吊り降ろされ据え付けられてゆきました。縦揺れを吸収する特殊な鋼鉄の螺旋のばねと緩やかにカーブした赤みのある金属のパイプを縦に束ねたような横揺れ吸収のばねが建物の底面積全体にわたって交互に並んでいます。実際に地震の力を受けて損傷したブロックは交換されるとのことでした。この校舎「江角記念ホール」を正面から見ますと建物全体が地面から少し浮き上がっているのがわかります。完成当時は新しい工法を用いているということで見学に見える方々もあり、場合に

よっては学内案内の時にこのブロック群の見える地下室までご案内することもありました。幸いにしてこの構造の効果を試す機会はまだ訪れていませんし、東日本大震災の十年も前の最新式であってみれば現在の耐震基準に照らしてはどうなりますでしょうか。江角記念ホールのある「江角講堂」は、空室の時には天井の明り取り窓と外の雑木林の借景を兼ねてステージ正面に大きくとられたガラス窓から入る自然光で明るさを保ち、講義室、講堂として使用する時は必要に応じて自然光を遮断して照明に切り替える仕組みになっています。座席の間隔やメモ台の大きさには授業に対応した配慮があり、音響も通常は講義、講演など「話す」音声に合わせてあります。一方講堂としては、照明や音響効果の設備が一通り整い、ステージに近いフロア部分では座席を取り外して車椅子用スペース、あるいは演技、演奏用スペースの補充としても使えるようになっています。ただし、この講堂を音楽会場として使用したい時には専門家に頼んで音響を音楽用に切り替えてもらってくださいとの事でした。また、ステージ前面には現在「暗天幕」と呼ばれる幕が設置されていますが、いつの日か「緞帳」もつけられることを予想して必要な準備はできているようです。

この校舎のエントランスホールには入って左側に広い壁面があり、佐々木真澄先生の七宝焼きパネルで飾られています。私としては当初、採光の良いこの場所に掲示板を設置してはと考えていましたが、学生教職員の使用だけでなく、講堂では一般公開の行事もあって外部からのお客様をお迎えするこの建物の「顔」になる部分に無粋な掲示板とは何事かという末吉理事長のクレームを頂き、なるほど、と心を入れ替えました。丁度その頃、短期大学教授で七宝焼きでは日本の権威でいらっしゃる佐々木真澄先生の個展にご招待を頂き、いつもながらの静謐な深みのある作風に改めて感銘を受けましたので、大学の玄関にもご寄贈いただいているこの先生の作品を三点一組くらいでこのスペースに飾らせていただけたら、と思いました。卒業学年の皆さんが卒業記念品として寄贈して下さることになり、予算に限度もあることなので恐る恐る佐々木先生にご相談しましたところ、自分はかねがね大きなスペースを使って製作してみたいと思っていたので是非やらせて下さいと快諾され、組作品ではなく壁面全体を使ったパネル作品として作っていただけることになりました。キャンパス全体をイメージした下絵が出来上がり、佐々木先生と施工担当の責任者が打ち合わせをされる段階になりますと、佐々木先生は、薄く割れる黒い粘板岩（スレート）をタイルのように正方形に切った建材のサンプルを持参されて、壁面全体にこれを張りつめてほしいといわれました。施工者の方は難しい顔をされてきつぱりと「できません」と答えられたので驚きましたが、「これは床用の建材です。平面に貼るために作られた建材を垂直面に貼ると必ずひずみが出ます。このひずみをどこで吸収するのか、これだけの広さの壁面では無理です」との説明に、そういうものかと素人は改めて驚いたこと

でした。しかし佐々木先生には芸術家として譲れない一線があって、デザインの上で背景にはどうしてもこの自然石の風合いが必要なのだと強調されました。笑顔もなく真剣に聞いておられた施工者の方とのお話が最終的にどうなったのか私は知らないのですが、作品が出来上がって見ると佐々木先生のお望み通りのスレートの壁面に大きく美しい七宝焼きの絵が浮き上がっておりました。皆様が今ご覧になる通りですが、十年以上も陽光にさらされて赤や青の色などはかなり精彩を失っているようです。新しい時は本当に鮮やかでしかも気品のある色調でした。立派な仕上がりを目にして、佐々木先生のご満足を思い、繊細な図柄の後ろでひずみを吸収して表向きには隙間のないスレートの貼り方に込められた技術者の工夫と苦心を思うにつけ、デザイン側として大切なことは大切と主張すれば構造側は何とかしてくれる、というホワイ先生との信頼の弁が聞こえるようでした。以来今日まで背景のスレートが剥がれたりひびが入ったりしたことはありません。施工された技術者の陰の功績でしょう。この作品に佐々木先生は「憧憬（それぞれの学び舎）」という題をつけておられます。「甘美で豊かな香りを漂わせて」たつ学び舎で学生たちそれぞれが得た印象や記憶が「懐かしい永遠の憧憬」に昇華して無言のうちに人生の養いとなり、人生の求心的な展望を示唆するものとなるであろうとの想いが作品のテーマとして示されています。佐々木先生が本学の学生にかけて下さっている期待とも言えましょうか。

このように天辰キャンパスに暮らす私たちは知らず知らずのうちに多くの方々の想いや期待、工夫や努力に包まれて影響を受けながら過ごしているのだと思います。ここに取り上げたのはほんの数例にすぎません。触れなかったことの広がりはお想像いただくしかありませんが、私の知らないことはさらに限りなく多いわけです。人と人とのつながりは時間を超え空間を超えて生きていることを私たちのキャンパスのあたたく優しい雰囲気は感じさせてくれるのではないのでしょうか。この美しい環境で、優れた先生方とのお交わり、職員の方々の行き届いた支えを頂き、いつも新鮮な学生たちの眼差しに囲まれて私は十八年もの年月を過ごしてまいりました。かけがえのない多くのものをいただきましたことを心より感謝いたしております。ありがとうございました。